
ポケットモンスター ジョウトに転生!?

ナンテコッタイ!!! <(^o^)>

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ジョウトに転生！？

【Nコード】

N2786Z

【作者名】

ナンテコツタイ！！！<（＾Ｏ＾）>

【あらすじ】

神のミスで死んでしまったポケモン好きの高校生タクヤは、ジョウトに転生することになった。使用するポケモンは生前ゲームで使っていたポケモンで、家にはポケモンの転送装置まである。タクヤはジムを回ってリーグに出場しようしようにと考える。

Prologue 転生前

？「ん？ここはどこだ……？」

俺はタクヤ。ポケモンが好きな高校生だ。今俺は、真っ白な空間にいる。

タクヤ「はあ、何にもねえな……。って、誰アンタ！？」

そりゃ驚くよ、いきなり空から人が降ってきたんだから。

「私は神だ」

タクヤ「ダメだ、ただの痛い人だ」

痛神「誰が痛い人だ！！って、のところまで痛神ってされてるし！！だから、私は神だって言っているだろうが」

タクヤ「で、神（笑）が一体何のようですか？」

神（笑）「お前今、神の後に（笑）付けただろ。しかもまた 変 わってるし。まあいい。お前には転生してもらう」

俺は耳を疑った。は？俺死んだの？

神「そう。お前は私のミスで死んだのだ」フンス

タクヤ「ちったア悪びれるよ……」

神「だからせめてもの詫びとして、ポケモンの世界に転生してもらうことになった」

タクヤ「あ、ああ。で、向こうに付いた時の手持ちは？地方は？」

神「お前、生前にポケモンしてただろ。手持ちとかのポケモンは生前にゲームで使っていたポケモンを使ってもらう。ボックスの代わりとして、転生後のお前の家になるところにでも転送装置を置いて

おこつ。あと、ジョウト地方だ」
タクヤ「ありがとうございます」

実際に会えるのか、俺のポケモンたちに……

神「さて、ここでひとつだけ願いを叶えてやろう。何かいい？」
タクヤ「うーん……俺が願えばそのポケモンは個体値が6Vになるとか？」

神「いいだろう。では、良い転生ライフを。お前のバックの中に細かいことを書いた紙を入れておく」

タクヤ「はい、ありがとうございます。って、うお!？」

床に穴があいた。うわあ~~~~落ちる~~~~!!!!

タクヤ「どうしてこうなった~~~~~~~~!？」

To Be Continued...

Episode 1 目覚めると29番道路

タクヤ「ん、んん？」

俺は目を覚ました。あのクソ神後で殺しちやる。で、ここはどこだ……？

タクヤ「とりあえずバッグとかの確認をするか。っと、手持ちは」と

腰にはボールホルスターがついていて、6個のモンスターボールがあった。

タクヤ「えっと、こいつが色違いのテッカニンで、こいつがガブリアスカ。これはハッサムで、これがゲンガーで、これはカイリキーで、最後にマルマインか……」

これはすべて俺が生前使っていたポケモンだ。特にお気に入りした。テッカニン。ポケトレで手に入れた色違いの陽気なツチニンを育てた。

タクヤ「次はっと、これはポケギアで、こっちがトレーナーカードか……。どれどれ」

ポケギアのマップを確認すると、ここは29番道路というのが分かった。トレーナーカードを見ると、名前はタクヤで、6年前にトレーナーになったことになっている。しかしバッジは一個もなし。誰かと旅したいから言い訳を考えとかないといけない。

タクヤ「で、これが図鑑で、バッグはこれか」

まず、図鑑の動作確認としてテッカニンを調べてみた。

テッカニン 忍ポケモン。ツチニンの進化系。鳴き声を聴き続けると、頭痛が収まらなくなる。見えないほどの速さで動く。

と、説明が流れた。

使える技は、虫食い、ひっかく、固くなる、吸血、すなかけ、乱れひっかき、心の眼、影分身、連続切り、嫌な音、剣の舞、切り裂く、高速移動、バトンタッチ、シザークロス

ちよいちよい、いつまで続くんだよ、オイ。

エアカッター、スピードスター、さわぐ、糸を吐く。

結局、テッカニンが覚える技の全てを覚えていた。

タクヤ「オイオイ、覚えられる技が4つより多くても大丈夫だとしても、覚えられる技全部覚えているとは……」

次にバッグを探ると、いろいろな回復道具やドーピング用品の他に紙が一枚入っていた。

タクヤ「なんだこの紙？何か書いてあるな、なにになに？」

タクヤへ

お前の家はポケギアのマップで確認しておけ。

今の手持ちはそれだが、そのほかのポケモンはお前の家で放し飼いにされている。

お前の家になるところには、一人使用人を置いておいた。お前のいない間の家とポケモンの管理はその人に任せておけ。

では、良いトレーナーライフを。

神より

タクヤ「神からの手紙か……。ま、とりあえずマップ確認しながら家に行くか」

とりあえずワカバタウンを目指すタクヤであつた……

T o B e C o n t i n u e d . . .

Episode 2 ワカバタウンと俺のポケモンたち

タクヤ「っと、俺の家になるのはここか……」

どーも、タクヤです。つい先ほど転生してきた者です。

俺は今、ポケギアを確認しながら自宅に向かっているところです。
今、自宅を見つけました。

タクヤ「まあ、入ってみるか……」

とりあえず門を開け、入ってみた。

？「おかえりなさいませ、タクヤ様」

タクヤ「うおっ！！」

玄関のドアを開けると、そこにはメイドが迎えていた。そのメイドは、金髪ロングな髪型で、スタイルもかなりいい。かなり美人だ。

タクヤ「ああ、アンタが例の神様が用意した使用人？」

メイド「はい。神様から手紙を預かっています。こちらを」

タクヤ「おお、サンキュー」

メイドからもらった、神様からの手紙を読んでみた。そこにはこんな内容が書かれていた。

タクヤへ

自宅についたらメイドが迎えていただろう？その娘がお前のメイドだ。

家の管理、お前の身の回りの世話は基本その娘がする。 お前が

いない間のポケモンの世話や、ポケモンの転送などもしてくれるぞ。では本題だ。その娘には基本何してもいいぞ。むしろ何もしない方が損というものだろう。抱いても咎めないし、ほかの娘に変えて欲しいのなら変えてやる。さしずめ性欲 理役として使ってもいいということだ。

では良い性

生活をな……

神より

タクヤ「ブッ！！！！！」

俺は吹き出してしまった。

メイド「どうされました？」

タクヤ「あ、アンタはこの手紙の内容知ってるのか？」

メイド「ああ、欲処理のことですか？」

タクヤ「ブッ！！！！そ、そうだよ。アンタはこれでいいのか？」

メイド「タクヤ様のご命令とあらば」

タクヤ「そ、そうか……」

メイド「もしかして、今から抱きたいと仰りますか？」

タクヤ「ち、違う違う！ちょっと確認しただけだ」

メイド「そうですか。では、家の中を案内しましょう」

そう言われて、いろいろな部屋を見ていった。広すぎると思えるほどのリビングや、普通の家のリビングほどの広さもある俺の部屋。使用人の部屋などを見て回った。そして……

メイド「こちらから、ポケモンが放し飼いにされている庭に出ることが出来ます。セキュリティは万全で、おそらくロケット団如きが入ることはできないでしょう……」

タクヤ「そうか……。おっ、アイツはカイリユウか。こっちにはジ

ユカインもいるな……。湖の方にはギャラドスやスターミーもいるな……。また手持ち変更の時は頼むわ」

メイド「その説明ですが、まずは家の中に入りましょう」

俺たちは家の中に入り、リビングに来た。

メイド「このパソコンが、転送装置です」

タクヤ「へえ……」

そこにはさほど大きくはないが、そこまで小さいわけでもないデスクトップパソコンと、その横にUSBケーブルでつながれた、半球状のくぼみの付いた小さな機械があった。

メイドは半球状のくぼみの付いた機械を手にして言う。

メイド「まず、放し飼いにされているポケモンをボールに戻し、この機械にセットします」

そう言うのと、次に小さめのノートパソコンと、同じ半球状のくぼみの付いた小さな機械を取り出した。

メイド「次に、同じくそちらでもボールをセットして、最後にパソコンでこのように操作すると転送されるのです」

タクヤ「ちよつと待て、パソコンのバッテリーは？」

メイド「それは神様の力を使って、永久電池にしてあるので大丈夫です。では、こちらのパソコンと転送装置を渡しておきます」

タクヤ「それはそれでどうかと思うんだが……。ま、いいか。俺はとりあえず疲れたから寝るわ」

メイド「私と一緒に？」

タクヤ「『疲れたから』と言ったのが聞こえなかったか？お前と一緒に寝たら理性が持ちそうにないんだが……」

メイド「冗談です。いつごろ起こせばいいでしょうか？」

このメイド、意外と茶目っ気があるようだ。それにしてもいつごろ起こしてもらおうかな……

タクヤ「じゃあ、飯ができたらいいいよ。旅立つのは明日にする。ウツギ博士の研究所にも行きたいしな」

メイド「了解しました。ではおやすみなさい」

タクヤ「おう、おやすみ」

とりあえず俺は、自室に来た。

ベッドに寝転がり、さっきまでのことを振り返る。

タクヤ「ふう、何かいろいろありすぎたな。美人のメイドさんとい、性欲処 役といい、精神的に疲れたよ……。ま、明日は旅立ちか……」

俺は目を閉じる。するとすぐに意識は眠りに落ちていった。

To Be Continued...

Episode 3 ウツギ研究所と新人トレーナー

タクヤ「はあ。昨日はいろいろありすぎて疲れた……」

ども、タクヤっす。昨日は散々でした。メイドに起こされて飯を食いに行ったら、メイドに「あーん」されそうになったし、風呂には突入してくるし……

タクヤ「ま、今日から旅立ちだしな！強気で行くぜ」

そう。今日は旅立ちなのだ。

タクヤ「そういえばジョウトではポケモンを一匹出しておくのが流
行っているんだっけ？よし、出てこいハッサム」

ハッサム『ハッサム！！！！』

タクヤ「ハッサム、今日は旅立ちだから強気で行くぞ。今日からよろしくな」

ハッサム『サム、ハッサム！！』

メイド「おや？タクヤ様、もう行かれますか？」

タクヤ「ああ。家のことは頼んだぞ？行くぞハッサム！」

ハッサム『ハッサム！！！！』

メイド「行ってらっしゃいませ、タクヤ様、ハッサム」

いよいよ旅立ちだ。新人トレーナーがいたら一緒に旅しようかな。
いつそ鍛えてやろうか……

そんなことを考えているうちに、ウツギ研究所についた。そういやウツギ博士って研究中は周りのことが見えなくなるんじゃないかな
たっけ。

タクヤ「ごめんくださいーい！」

ハッサム『ハッサム、ハッサム！』

？「はい？どちら様？」

タクヤ「どうも、トレーナーのタクヤです。こっちはハッサム」

ハッサム『ハッサム！』

タクヤ「こちらの研究者さんですか？」

研究員「そうだよ。博士に用事？」

タクヤ「まあ、トレーナーとして会っておきたいので」

研究員「そうか。じゃあ入って」

タクヤ「失礼します」

研究所に入った俺たち。そこには新人用のポケモンである、チコリータ、ワニノコ、ヒノアラシと、それを見ているウツギ博士がいた。

タクヤ「ウツギ博士」

ウツギ「ん？誰だい君は？」

タクヤ「トレーナーのタクヤです。昨日ワカバタウンに引っ越してきましたんです」

そう。俺の出身は一応カントーのタマムシシティになっている。昨日引っ越してきたことになっているのだ。

ウツギ「そうか、君が引っ越してきたのか……。そのハッサムは君のかい？」

タクヤ「そうです。ほらハッサム、挨拶しろ」

ハッサム『サムサム、ハッサム！』

ウツギ「ははは、元気がいいね。で今日はどいった用事かい？」

タクヤ「まあ、引越しの挨拶と、トレーナーとしてウツギ博士に会っておきたかったです。まあ、今日旅立ちの新人はいないかな

？とか考えてたりしますけど」

ウツギ「新人かい？それなら二人居るよ。一人はブリーダーを目指してるのか」

タクヤ「マジすか？名前はなんですか？」

ウツギ「確か、コトネちゃんとカズナリ君だったかな」

マジか？あのシンオウに来てサトシたちと会ったアイツらか。

タクヤ「俺も会ってみたいです。いいスか？」

ウツギ「もちろんだよ。先輩として色々と教えてあげて欲しいし。

そういえば君はジムを回ってるのかい？」

タクヤ「俺は元々研究職に就きたかったからトレーナーになっただけですからジムは回ってないんです。でも最近実力を試したくなっただけ」

ウツギ「そうか。応援してるよ」

タクヤ「はい。ありがとうございます」

そんな話をしてる間にハッサムはチコリータたちと遊んでいた。

ハッサム『サム、ハッサムハッサム、サム』

チコリータ『チコ！』

ワニノコ『ワニワニワニ！』ヒノアラシ『ヒノー！』

ハッサム『サムー』

仲良くなってるし……

ウツギ「図鑑は持っているかい？」

タクヤ「自作のならこれを」

図鑑は自作ということにしてある。

ウツギ「自作！？君はすごいね！！」
タクヤ「いえいえ」

そんなことをしていると、新人トレーナーが来たようだ。

コトネ「こんにちは〜！」

マリル『リルル〜』

カズナリ「待つてよコトネ」

コトネ「カズナリ遅い！」

ウツギ「こんにちは、コトネちゃん、カズナリ君」

タクヤ「こんにちは」

コトネ「こんにちは〜。この人は？」

タクヤ「ああ、俺はタクヤ。昨日引越してきたトレーナーだよ」

カズナリ「はあはあ。こんにちは、ウツギ博士。こちらの人は？」

ウツギ「昨日引越してきたタクヤ君だよ」

タクヤ「で、そのチコリータたちと遊んでいるのが俺のポケモン

のハッサムだ。ほらハッサム、挨拶だ」

ハッサム『ハッサム！サムサム、ハッサムー！』

コトネ「私はコトネで、こっちがマリル。よろしくって事ね、ハッ

サム」

マリル『リルル〜』

カズナリ「僕はカズナリです。よろしくお願いします」

はあ、アニメに出てきたコトネとカズナリそのものだ。

ウツギ「じゃあ、新人トレーナー用のポケモンをあげるから、この
三匹から選んでね」

タクヤ「みんな頼りになるぞ」

コトネ「うーん、どの子にしようかな……」

カズナリ「そうですね〜……」

かれこれ10分。悩んだ末に……

コトネ「じゃあ、私はチコリータにします。チコリータ、よろしく
って事ね」

カズナリ「じゃあ、僕はワニノコにします」

チコリータ「チッコー!!」

ワニノコ「ワニワニ!!」

ヒノアラシ「ヒノ〜……」

ハッサム「ハッサム、サム」

選ばれたチコリータとワニノコはとても喜んでいて、選ばれなくて落ち込んだヒノアラシをハッサムが慰めていた。

タクヤ「そうだ。君たちの旅に俺もついてっていいか？」

カズナリ「タクヤさんが？」

コトネ「勿論、いいって事ね」

チコリータ「チコ!!」

ワニノコ「ワニー!!」

ハッサム「サムサムー!!!」

タクヤ「サンキュー!。ハッサムもこいつらと仲がいいみたいだし、
喜んでるよ」

ということで、俺たちは旅立つ

ウツギ「ちょっと待ってくれるかい？」

タクヤ「何ですか？ウツギ博士」

ウツギ「タクヤ君にヒノアラシを貰って欲しいんだ」

タクヤ「いいんですか？」

ウツギ「君のハッサムと仲良くなったみたいだし、引き離すのもかわいそうだからね。君だったら悪いようにはしないだろうし」
タクヤ「ありがとうございます」

俺はバッグからパソコンと転送装置を出した。

ウツギ「何だいそれは？」

タクヤ「自作の転送システムで家と繋げるんです」

ウツギ「それも自作？すごいね君は」

コトネ「ほんとにすごいって事ね」

タクヤ「もしもし？」

メイド「タクヤ様、どうされました？」

タクヤ「早速手持ちの入れ替えだ。俺はそっちにカイリキーとマルマインを送る。そっちはバクフーンを送ってくれ」

メイド「わかりました」

手持ちの入れ替えが終わった。

タクヤ「よし改めて、ヒノアラシゲットだ！」

ハッサム『ハッサム！』

タクヤ「よし、出てこいバクフーン！」

バクフーン『バクッ！』

カズナリ「うわー、バクフーンだ！」

タクヤ「バクフーン、ヒノアラシの世話を頼む。ハッサムも協力してくれ」

バクフーン『バク！』

ハッサム『ハッサム！』

バクフーンは背中にヒノアラシを乗せた。

カズナリ「こう見ると親子みたいですね」

バクフーン『バクバク!』

ヒノアラシ『ヒノー』

タクヤ「もう仲良くなったみたいだな。じゃあ行くぞ、コトネ、カズナリ」

コトネ「うん!」

カズナリ「はい!」

ハッサム『ハッサム!』

ウツギ「じゃあ気を付けてね」

俺たちは研究所を後にした。

To Be Continued...

Episode 4 自己紹介 新人トレーナーコトネ&カズナリ

どうも、タクヤです。29番道路に来了います。

タクヤ「とりあえず改めて自己紹介しようか。まず俺から」

俺は一息置いて自己紹介を始める。

タクヤ「俺はタクヤ。年は16だ。トレーナー歴6年で今年が7年目だ。俺はもともと研究職のほう希望だったからジムは回っていないが、実力を試したいから今年からジムを回る。敬語とか、そういうのはいいからな」

カズナリ「よろしくお願いします」

コトネ「よろしくって事ね」

タクヤ「で、手持ちのポケモンは、ここにバクフーンとハッサム、さっき貰ったヒノアラシだろ。であと三体はこいつらだ！」

俺は3つのボールを投げた。するとポケモンが出てくる。

タクヤ「テッカニンとゲンガー、ガブリアスだ」

コトネ「すごい！テッカニンの色違い！？」

カズナリ「ガブリアスも強そうですね！」

テッカニン「テッカ！！」

ゲンガー「ガー！！」

ガブリアス「ガアブッ！」

次はコトネの番か……

コトネ「私はコトネ。こっちはマリル。で、さっき貰ったチコリー

タ。よろしくって事ね」

マリル『リルル〜』

ハッサム『ハッサム!』

チコリータ『チコー!』

カズナリ「僕はカズナリです。こっちがさっき貰ったワニノコ」

ワニノコ『ワニワニ!』

タクヤ（そっぴや、俺が願えばポケモンの個体値が6vになるように神に能力もらったんだっけ）

俺はチコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシを6vにすべく願う。

タクヤ（チコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシの個体値を6vにしろ!）

そう願った。すると、頭に念話が届いた。

神「早速6vの願いか……」

タクヤ「神様!？」

神「願い、届いたぞ。今よりチコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシの個体値は6vだ」

タクヤ「サンキュー神様」

この念話の時間僅か0・01秒。

タクヤ「まあよろしくな、コトネ、カズナリ」

コトネ「うん」

カズナリ「はい」

タクヤ「そっぴだ。コトネ、さっきもらったポケモンでバトルしようぜ」

コトネ「いいね、それ」

カズナリ「はい」

タクヤ「カズナリ、審判頼む」

カズナリ「わかりました」

俺はヒノアラシを呼び寄せ、肩に乗つけた。

カズナリ「これより、タマムシシティのタクヤ対ワカバタウンのコトネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体です」

タクヤ「行くぜえヒノアラシ！」

ヒノアラシ『ヒノーーー！！！！！！』

背中が燃え上がった。

タクヤ「まずは使える技の確認つと……」

ヒノアラシ 火鼠ポケモン。憶病で、いつも体を丸めている。襲われると、背中の炎を燃え上がらせて身を守る。

使える技は 体当たり、煙幕、睨みつける、火の粉、火炎車、丸くなる、スピードスター、火炎放射、転がる

やはり使える技の全てを覚えていた。しかし音量を小さくしているので、二人は気づいていない。

コトネ「行くわよチコリータ！」

チコリータ『チッコー！！』

チコリータとヒノアラシはにらみ合う。確かこいつは光の壁が使えるたな……。ソーラービームにも注意しないと。

タクヤ「先行はそっちでいいぜ」

カズナリ「先行はコトネから。では、始め！」

コトネ「先手必勝！チコリータ、葉っぱカッター！」

タクヤ「ヒノアラシ、ジャンプだ！」

チコリータ『チー、ッコー！！』

ヒノアラシ『ヒノーーーーー！』

チコリータは葉っぱを飛ばすが、ヒノアラシは飛び上がった。

タクヤ「ヒノアラシ、回転しながら煙幕撒布！」

ヒノアラシ『ヒノooooooooー！』

コトネ「チコリータ、気を付けて！」

チコリータ『チー』

タクヤ「残念、ヒノアラシは地面の下だ！ヒノアラシ、地面から顔を出して火の粉！！！！！」

ヒノアラシ『ヒノー！！！！！！』

コトネ「す、すごい。穴から顔を出して攻撃なんて……！」

タクヤ（貰ったばかりなのにスピードもパワーも段違い。おまけに技は全部使える。どうということだ……？？）

考えていると、またもや念和が来た。

神「どうだ？お前のポケモンのパワーは」

タクヤ「どうということだ？」

神「お前が手に入れた時点ではそう強くないが、6vにしたときにお前のポケモン限定で、全能力の努力値を252にすると、技をすべて覚えさせることをした」

タクヤ「だからか……」

この間僅か0.01（ry

タクヤ「さあ、これで終わりだ。丸くなるの後に転がる！」

ヒノアラシ『ヒノオー！』

チコリータ『チコー。チコオ……』

コトネ「ああ、チコリータ！」

カズナリ「チコリータ、戦闘不能。よって勝者、タマムシシティのタクヤ！」

タクヤ「よくやったぞヒノアラシ。バクフーン、お前も褒めてやれ」
バクフーン『バクバク！』

ヒノアラシ『ヒノオノノ』

コトネ「さすが先輩トレーナーって事ね。大丈夫、チコリータ？」

チコリータ『チコオ……』

タクヤ「なあ、コトネ、カズナリ」

コトネ「何？」

カズナリ「なんでしょう？」

タクヤ「戦った相手のポケモンによって、能力の伸びが変わることって、知ってるか？」

コトネ「エツ？」

カズナリ「本当ですか？」

とりあえず、こいつらに努力値の理論を教えるところ。

タクヤ「これは本当だ。例えば、攻撃を伸ばしたかったらオタチやワンリキーなんかを倒すといい。スピードならビリリダマやポツポなんかだ。特殊攻撃ならケーシヤやゴース。防御ならイシツブテやグライガーだ。特殊防御ならメノクラゲやバリヤーだ。また、性格によっても伸びやすい能力、伸びにくい能力がある。陽気なら、特殊攻撃は伸びにくいし、素早さが伸びやすいという具合だ。これは俺が研究した」

もちろん嘘だ。ただの現実世界の廃人知識だ。

タクヤ「見た感じワニノコは生意気で、チコリータは真面目、マリルはちゃんちゃって感じだろ？生意気な性格は特殊防御が伸びやすく、素早さが伸びにくい。真面目は平均的に伸びる。ちゃんちゃは攻撃が伸びやすく特殊防御が伸びにくいんだ」

ヒノアラシはさしずめ無邪気ってところだろう。この世界では物理技も使うからちょうど良く二刀流にすることにした。

タクヤ「だから、これを踏まえて修行すれば、絶対に強くなれる」

コトネ「ありがとう」

カズナリ「勉強になりました」

タクヤ「とにかく、傷ついたチコリータはボールに戻して、ヨシノシティのポケモンセンターを目指そうぜ」

コトネ「うん」

カズナリ「はい」

また俺はヒノアラシをバクフーンの背中にのせ、ハッサム、バクフーンと共に歩きだした。目指すはヨシノシティ！

To Be Continued...

Setup 1 タクヤ

〈名前〉

タクヤ

〈姿、服装〉

髪型のイメージは生徒会の一存の杉崎鍵

顔は基本的に糸目だが、ここぞというときには目を見開く

細身の黒いフレームのメガネをかけている

身長は178cmくらい

服装はグレーのスボンに空色のYシャツで、上にコートまたはグレーのパーカーを着ている

また、偶にだがスーツを着ることがある

〈人物〉

基本的に仲間や友人、他人には優しいが、自分の気に入らない行動をする人や、敵には容赦をしない

怒ると物凄く怖い

ポケモン廃人

〈ポケモン〉

転生時の手持ちは色違いのテッカニン、ガブリアス、ゲンガー、ハッサム、カイリキー、マルマイン

自宅にはたくさんのポケモンがいる

Episode 5 ポケモンセンターとコトネの初ゲット

タクヤ「ここがヨシノシティか……」

ども、タクヤです。ただいまヨシノシティに来ております。

タクヤ「おい、コトネー、カズナリー！ポケモンセンター行くぞー！」

コトネ「待つてー！」

カズナリ「待つてくださーい！」

俺たちはポケモンセンターに来た。まずはポケモンの回復をしないと……

タクヤ「ほら、回復してもらうぞ。戻れハッサム、バクフーン、ヒノアラシ」

コトネ「あつ、私も」

カズナリ「僕も」

タクヤ「ジョーイさん、どのくらいで回復は終わりますか？」

ジョーイ「一時間くらいです。そういえば、ジョウトリーグの出場受付はしましたか？」

タクヤ「あつ、まだです。はい、トレーナーカードと図鑑。お願いします。コトネ、カズナリ、お前らはリーグ出場しないのか？」

コトネ「カズナリはしないけど私はするって事ね。図鑑とトレーナーカード、お願いします」

ジョーイ「はい、わかりました」

数分後、受付を終えたのか、ジョーイさんが戻ってくる。

ジョーイ「はい、終わりました。では、頑張つてジムバッチを8つ
全て集めてください」

タクヤ「はい。ありがとうございます」

コトネ「ありがとうございます」

タクヤ「ああ、カズナリはどうするんだ？」

カズナリ「僕はブリーダーを目指しているので」

タクヤ「そか」

うーん、これからどこで時間を潰そう……

タクヤ「そうだ！コトネ、カズナリ、西の海岸で釣りしようぜ」

コトネ「釣り？」

カズナリ「いいですね。しましうよ」

タクヤ「おう」

俺たちは海岸へ向かった。さて、何が釣れるか……

タクヤ「まず、コトネは女の子だからこの軽いやつにしておこうか」

コトネ「ありがとうって事ね」

タクヤ「カズナリも非力そうだからこれかな？」

カズナリ「非力って……」

タクヤ「で、俺はこれで。餌はこれを自由に使ってい」

と言って、神様からもらったバッグに入っていたポケモンフーズ
を差し出した。

タクヤ「じゃ、俺から行くぜ！」

俺が海に糸を垂らす。すると二人も順に垂らしていった。

十分後

暇だ。釣れない。

タクヤ「何も釣れねえ……」

そんなことをつぶやいた直後、コトネの釣竿がクイツ、と引っ張られた。これは大きいな。

コトネ「ちよっ、一人じゃ無理！」

タクヤ「ハア……。ちよっと貸してみる。フンッ」

俺がリールを巻いたり、引っ張ったりしても少し動くだけ。かなりでかいな……

コトネ「もう無理ー！」

タクヤ「諦めんな！う、うおおおおおおお！……！……！」

俺は雄叫びを上げながら思いっきり引き上げた。するとそこに食

いついていたのは……

キングラー『ゴキゴキ!』

超デカイキングラーだった。

コトネ「うわあ、キングラーだ!」

コトネは図鑑を取り出し検索した。

キングラー ハサミポケモン。クラブの進化系。あまりにも 大きくなりすぎた ハサミは 持ち上げるのが やつとで 狙いは 上手く 付けられない。

タクヤ「やつべえ、ポケモン預けてていねえじゃん!」

カズナリ「そうですよ、ポケモンセンターに預けてるんですよ!」

そう、ポケモンセンターに預けているためポケモンがいないのだ。

タクヤ「しょうがない、転送装置で。おい!」

メイド「なんでしょう」

タクヤ「緊急事態だ! マルマインを送れ!」

メイド「了解しました」

タクヤ「よっしゃあ! 来い、マルマイン!」

マルマイン『マルン! マルルルン!』

タクヤ「マルマイン、少しの間コトネの言うことを聞いてくれ!」

マルマイン『マルルン! マルン!』

タクヤ「コトネ、俺のマルマインを使え!」

コトネ「ありがとうって事ね! 技は!？」

タクヤ「多分お前の思いついた技はたいてい覚えてるぞ! 適当に弱

タクヤ「じゃあ戻れ、マルマイン」

俺はマルマインをボールに戻し、転送した。

タクヤ「そうだコトネ、キングラーを出してくれ」

コトネ「わかった。出てきてキングラー！」

キングラー『ゴキ……ゴ……キ』

タクヤ「やっぱ傷ついてるな。えっと、こうしてこうして」と

俺はキングラーの処置をした。

タクヤ「はい、終わり」

カズナリ「すごいですねー。ブリーダーとして見習わないと」

キングラー『ゴキッ！ゴキゴキッ』

タクヤ「そろそろポケモンセンターで治療も終わったんじゃないか？」

コトネ「そういえば忘れてた。行こうって事ね」

カズナリ「そうだね」

俺たちはまたポケモンセンターに向かっていった。

To Be Continued...

Episode 6 キングラーの初バトル!? 高速蟹の恐怖!!

タクヤ「ジョーイさん、回復終わりましたか?」

ジョーイ「はい、終わりましたよ。あら?そのキングラーさつき捕まえたの?」

コトネ「そういう事ね」

キングラー『ゴキゴキ』

カズナリ「手持ちがない状態で出てきたので大変でした」

タクヤ「だな」

ジョーイ「君たち、最初のジムのことなんだけど、ここから北北西に最初のジムの街、キキョウシティがあるわ」

タクヤ「マジすか?ありがとうございます」

ジョーイ「頑張ってくださいね?」

コトネ「頑張るって事ね、キングラー」

キングラー『ゴキッ!ゴキゴキッ!』

俺たちは最初のジムの街、キキョウシティへ向かうため、ポケモンセンターを後にした。

タクヤ「ここは30番道路だな……」

コトネ「キキョウシティはどのくらい先にあるの?」

カズナリ「この本によると、結構歩くみたいだよ」

タクヤ「ま、歩くのも旅の醍醐味だ」

?「ちよつといいかい?」

俺たちはキキョウシティを目指して歩いていると、誰かが話しかけてきた。

タクヤ「誰だい?」

シュウ「僕はシュウ。この中の誰か、僕と勝負してくれないか？」
タクヤ「勝負か……。コトネ、お前がしたらどうだ？」

コトネ「えっ、私！？別にいいけど……」

タクヤ「よし決まりだ。カズナリ、審判な」

カズナリ「はい」

シュウとコトネの勝負が決まり、ちょっとした広場に向かう俺達。

カズナリ「これより、コトネ対シュウのポケモンバトルを始めます！お互い使用ポケモンは一体！どちらかが先に戦闘不能になったとき、負けとします！なお、道具の使用は認められません！」

コトネ「じゃあ私から行くわ！行けっ、キングラー！」

キングラー『ゴキゴキッ！』

タクヤ「ほう、キングラーの初バトルか……。あ、そうだ6v6v」

俺はキングラーを6vにしると願った。これでキングラーは6vだ。

タクヤ「さて、シュウとやらは何を出してくるか……」

シュウ「相手はキングラーか……。それなら、行けっスピアー！」

スピアー『スピスピ！』

タクヤ「スピアーか……。こりゃあスピードが厄介だぞ……」

コトネ「スピアーか……」

コトネは図鑑を取り出し、スピアーと、キングラーの技を調べた。

スピアー 毒蜂ポケモン。コクーンの進化系。どんな相手でも強力な毒針で仕留めてしまう。偶に集団で襲ってくる。

キングラー 使える技は、高速移動、怪力、馬鹿力、剣の舞、クラ

ブハンマー、鉄壁、はさむ。

タクヤ「高速移動？遺伝技じゃないの？」

コトネ「高速移動と剣の舞が使えるのね、キングラー」

カズナリ「それでは、始め！」

コトネ「まずはこっちから行くわ！キングラー、高速移動！」

カズナリの相図でコトネが先手を決めた。

キングラー『ゴキゴキゴキゴキゴキゴキゴキ！……！……！……！』

タクヤ「は、^{はえ}早ええええ！……！……！……！」

シュウ「な、なんなんだよそれ、本当にキングラーか！？クソツ！スピアー、ダブルニードル」

スピアー『スピツ！』

コトネ「まだよ！キングラー、もう一回高速移動でスピードを上げてかわして！」

キングラー『ゴキゴキゴキゴキツ！……！』

シュウ「あ、当たらない！？」

コトネ「今度はこっちの番！キングラー、剣の舞3連発！」

キングラー『ゴ、ゴキキキキキキキキキキキツツツツ……！』

！……！』

タクヤ「……ああ、どんどんキングラーが凶悪に……」

シュウ「まだまだ！スピアー、シザークロス！」

スピアー『ス、スピアアアアアアアア！……！……！』

コトネ「まだまだ高速移動……！」

キングラー『ゴキアアアアアア！……！……！』

コトネ「いくわよっ！キングラー、怪力……！」

キングラー『ゴキキキキキキキキキキキツツツツ……！』

俺は目を疑った。キングラーが、なんと、飛翔んだのだ！

ギョーンッ！、と風切り音が鳴ったと思ったら、スピアーより遙か上にキングラーがいて、そのまま高速落下して怪力を決めた。

スピアー「スッ！？スピイイイイイイイイイツッ！！！！！！」

シュウ「スピアー、かわせっ！かわすんだ」

シュウの叫びも虚しく、キングラーの高速かつ強力な一撃で勝負は決した。

タクヤ「……こんな戦い方も、あるんだな……」

そんな小さなタクヤの眩きが、虚空に消えた。

スピアー「……ス……スピ……スピア……」

カズナリ「スピアー、戦闘不能！よって勝者、コトネ！」

タクヤ「すごかったぞ、コトネ」

コトネ「やったあ！！！」

シュウ「ありがとう、コトネ。君のキングラー、すごかったよ」

コトネ「ありがとう、シュウ」

シュウ「まさか、キングラーが飛翔^とぶとは思わなかったよ」

カズナリ「僕も、目を疑いました」

これ以来このバトルは、俺の記憶の中で、「高速蟹の恐怖」と名付けられた。

次に向かうはキキョウシテイ！

To Be Continued...

Episode 7 キキョウシティ マダツボミの塔のオバケ騒動！！

タクヤ「ついたぞ、ここがキキョウシティだ」

ども、タクヤです。俺たちは今、やっとキキョウシティにつきました。

タクヤ「こんばんは、ジョーイさん」

そう、「こんばんは」ということからわかるように、ついたのは夜だった。

ジョーイ「はい、こんばんは」

コトネ「あれ？ジョーイさんさっきまでヨシノシティにいませんでしたか？」

ああ、アニメポケモンのあの設定知らないのか……

タクヤ「コトネ、カズナリ、これを見る」

コトネ「えっ！？」

カズナリ「これって！？」

俺が見せたのはガイドブックのようなものだ。つまり……

コトネ「カズナリ「みんな同じ顔！？！？」」

タクヤ「そ。全国のジョーイさんは全員がそっくりで、しかも何らかの繋がりがあるんだ。ああ、ジュンサーさんも同じだぞ」

カズナリ「それは知りませんでした……」

コトネ「すごいわね」

タクヤ「ま、それはそうとして、ポケモンの回復お願いします。あと、部屋はあいてますか？」

ジョーイ「はい、お預かりします。部屋は二人部屋が一部屋だけならあいてますよ」

タクヤ「そつすか。じゃあそこつておきます」

ジョーイ「はい」

コトネ「二人部屋つて、一人どうするの？」

カズナリ「まさか野宿するんじゃない？」

タクヤ「バカ言え。俺はソファとかで寝るからベッド使え」

コトネ「それはタクヤに悪いよ」

カズナリ「そうですよ。タクヤさんがベッド使ってください」

タクヤ「人の好意は素直に受け取るもんだぞ？」

カズナリ「わかりました。ありがたく使わせてもらいます」

コトネ「ありがとう、タクヤ」ニコッ

タクヤ「お、おう。どういたしまして。じゃ、じゃあおやすみ／＼」

俺たちは眠りにつき、朝を迎えた。

タクヤ「よし！ジム行くぞ！」

コトネ「おー！」

カズナリ「頑張ってください！」

タクヤ「おう！」

俺たちはジムに行き、ジム戦の予約をしようとしたのだが……

受付「お二人はマダツボミの塔には行かれましたか？そこでお坊さんのお師匠様に勝たなければジム戦は認められません」

タクヤ（ヤベツ、忘れてた）

コトネ「そんな」

カズナリ「ま、まあ行けばいいじゃないか」

受付「それはそうと、こんな噂を知っていますか？」

タクヤ、コトネ、カズナリ「噂？」

受付「なんでもマダツボミの塔は夜に登ると、オバケが出るそうですよ」

カズナリ「お、オバケ！？」

タクヤ「面白そうじゃん。どうせなら夜に行こうぜ！（どうせオバケの正体はゴースだと思っし、こいつらのどちらかに捕まえさせたいし）」

カズナリ「えゝ！？」

コトネ「あゝ、カズナリ怖いんだゝ」

タクヤ「ま、いいや。さっさと夜まで時間潰そうぜ」

カズナリ「そ、そんなゝ……」

俺たちは夜まで時間を潰し、マダツボミの塔に来た。

タクヤ「よし、来たぞマダツボミの塔！」

コトネ「じ、実際に見ると結構雰囲気あるって事ね……」

カズナリ「もうやめましようよゝ」

タクヤ「よし、いくぞゝ！」

俺は二人に有無を言わずマダツボミの塔に入った。

タクヤ「ま、一応ポケモン出してくか。出てこいテッカニン！」

テッカニン『テッカ！』

コトネ「うう、マリルゝ」

マリル『リルルゝ！』

カズナリ「気絶中 俺が引っ張ってる

うゝん、何も無い。

と、そのとき……

？『ゴースゴスゴスゴスwwww』

？『ゴースゴスゴスゴスwwww』

？『ゴースゴスゴスゴスwwww』

コトネ「！？ 笑い声が！」

タクヤ「やっぱこの声はアイツかよ」

カズナリ「アイツ？」

タクヤ「テツカニン、素早さで翻弄して当たり一体を辻斬りでかき回せ！」

テツカニン『テツカ！』

？『ゴ？ゴーーーーース！！ゴースゴス、ゴース！！！！』

タクヤ「さて、さつさと姿を見せろ、ゴース！」

コトネ「ゴース！？」

カズナリ「と、いうことは幽霊の正体って」

タクヤ「そういうことだ」

そこでコトネが図鑑を取り出した。

ゴース ガス状ポケモン。薄い ガスのような 体で 何処にでも
忍び込むが 風が 吹くと 吹き飛ばされる。

ゴースA『ゴ……ゴース』

ゴースB『ゴスゴス！』

ゴースC『ゴース！』

タクヤ「さ、テツカニン、もう一回辻斬り！」

テツカニン『テツカ！テツカ！』

ゴースA『ゴ……』

一体のゴースは完全に戦闘不能になってしまった。

ゴースB『ゴース！！！！！』
ゴースC『ゴスゴス、ゴース！！！！』
コトネ「ゴースと分かれれば怖くないって事ね。マリル、水鉄砲！」
マリル『リイ、ルウウウウウウ！！！！！！』
ゴースC『ゴ？ゴオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！』

さらにもう一体のゴースは水鉄砲で場外に吹っ飛ばされた。

カズナリ「ワニノコ、お願いします！」
ワニノコ『ワニワー！！！！』
カズナリ「噛み付く！」
ワニノコ『ワニっ！！』
ゴース『ゴ！？ゴ……ース』
カズナリ「今です！モンスターボール！」

カズナリはモンスターボールを投げた。スイッチ部分が点滅し、ボールが揺れる。数回揺れたところで、パチンッ！という音が鳴った。

カズナリ「ゴース、ゲットです！！」
ワニノコ『ワニワニワー！！！！』
タクヤ「良かったな、カズナリ」
コトネ「そうね」
タクヤ「じゃ、お坊さんのお師匠様に会いに行こうか」
カズナリ「はい！」
コトネ「うん！」
テツカニン『テツカ！！！！』
ワニノコ『ワニっ！！！！』
マリル『リルウ』

こうして、ゴースをゲットしたカズナリ。次に目指すは、マダツボミの塔の頂上。

T o B e C o n t i n u e d . . .

Episode 8 マダツボミとお師匠様!!

タクヤ「ふう、やっと頂上か……」

コトネ「高いつて事ね……」

カズナリ「疲れた……」

マリル「リルル」

ここはマダツボミの塔の頂上。あれがお坊さんのお師匠様だろう。ここまでくるのは大変だった。ゴースが他にもいて、カズナリのゴースに説得を任せたり、お坊さんが立ちほだかったり。

タクヤ「貴方がここのお坊さんのお師匠様、ですね？」

師匠「いかにも。こんな夜更けに、お主らはわしに挑戦するのか？」

タクヤ「はい」

コトネ「私もです」

師匠「よからう。ではまずそちらの少年、バトルを始めようか」

タクヤ「はい！」

坊主「では、ただいまより、お師匠様対挑戦者のタクヤのバトルを始めます！お互い使用ポケモンは三体！先にすべてのポケモンを失ったものの負けとします！」

タクヤ「行くぜヒノアラシ！」

ヒノアラシ「ヒノヒノオー!!」

師匠「行きなさいマダツボミ！」

マダツボミ「マダツボ」

坊主「それでは、始め！」

師匠「こちらから行かせていただく。マダツボミ、ツルの鞭！」
マダツボミ「マダマダ」

ツルの鞭がヒノアラシに襲いかかる。

タクヤ「ヒノアラシ、バックスステップで交わしてジャンプ！そこからフィールド全体に火炎放射！」

ヒノアラシ『ヒノッ、ヒノッ、ヒノッ！ヒノッッッ！！！！ヒイイイ、ノオオオオオオオオ！！！！！！』

フィールド全体を炎が包む。そこに居たのは黒焦げになって倒れているマダツボミだった。

坊主「マダツボミ、戦闘不能！ヒノアラシの勝ち！」

タクヤ「よくやったぞヒノアラシ。もう一回頼む」

ヒノアラシ『ヒノッ』

師匠「ほう。お主なかなかやりおるな。ポケモンへの気遣いも忘れない。良いトレーナーじゃな。次は、ウッドン！行きなさい！」

ウッドン『ウッドオン……』

タクヤ「ありや、進化系か」

コトネ「あれがウッドン。さすがお師匠様。持ってるポケモンが違うつて事ね」

ウッドン ハエ取りポケモン。マダツボミの進化系。体内では強力な溶解液を精製しているが、それを分解する物質も精製しているので 自分は 溶けたり しない。

タクヤ「相手にとって不足なし！ヒノアラシ、穴を掘る！」

ヒノアラシ『ヒノヒノッ！！』

師匠「ウッドン、地面の揺れを感じるんじゃない」

ウッドン『ウツツドオン！！』

カタ、カタ、と地面が揺れる。だが……

師匠「ウツドン、そこじゃ！ソーラービーム！」
ウツドン『ウツドオオオオオオオン！！！！』

タクヤ「フツ。ヒノアラシ、噴火！」

ヒノアラシ『ヒノオオオ！』

揺れたのはダミー。後ろではなくしたから噴火を繰り返した。これだけでウツドンは戦闘不能になる。

師匠「まさか、ここまでとは」

坊主「ウツドン、戦闘不能！ヒノアラシの勝ち！」

師匠「では、こちらを倒せるかな？来い、ヨルノズク！！！」

ヨルノズク『クルルルル！！！！』

カズナリ「ヨルノズクですか！？」

タクヤ「まだ行けるな、ヒノアラシ？」

ヒノアラシ『ヒノッ！』

そのとき、ヒノアラシの体が光に包まれた。

コトネ「あの光は！！」

カズナリ「進化ですか！？」

タクヤ「進化か……」

マグマラシ『マグッ！！』

師匠「お主のヒノアラシ、進化したか……。ヨルノズク、ゴッドバード！」

ヨルノズク『クルルルルル！！！！』

ヨルノズクの体が淡く発光する。

タクヤ「マグマラシ、スピードスター！」

マグマラシ『マグウ！！！！』

ヨルノズク『クルッ！？クルルルルル！』

マグマラシの星形の光線がヨルノズク目掛けて飛んでいく。だが、ヨルノズクもゴッドバードの溜めを終え、突進してくる。

師匠「ヨルノズク、ゴッドバードの起動を変えてマグマラシに攻撃しなさい！」

ヨルノズク『クルルル！クルッ、クルッポー！！！！』

マグマラシ『マグマッ！？マグウ、マグッ！』

マグマラシはモロにゴッドバードを受けてしまったが、無理やり軌道修正されたゴッドバードは威力もない。

タクヤ「マグマラシ、火炎放射でフィニッシュ！」

マグマラシ『マア、グウウウウウ！！！！』

ヨルノズク『クルッ！？クル……ルルル……ル……』

坊主「ヨルノズク、戦闘不能、マグマラシの勝ち！よって勝者、挑戦者タクヤ！！」

タクヤ「やったぜ！マグマラシ、ありがとう！！」

マグマラシ『マグマグッ』

コトネ「タクヤ、すごいよ！」

カズナリ「素晴らしいバトルでした！」

師匠「戻れ、ヨルノズク！ゆっくり休め。いやあ、お主タクヤと言ったな？素晴らしいバトルじゃった。良いトレーナーを目指せよ？」
タクヤ「はいっ！」

お師匠様に勝ったタクヤ。コトネも同じくバトルしたが、チコリータ、マリルが戦闘不能になりながらも、「高速蟹の恐怖」の再来で勝った。いよいよ明日はキキョウジムだ！！！！

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

Episode 9 初ジムバトル!! タクヤvsハヤト!!

タクヤ「すみません、ジム戦しに来ました」

ハヤト「挑戦者は君かい？俺はジムリーダーのハヤト。鳥ポケモン使いさ」

タクヤ「ハヤトさん、ジム戦は俺だけじゃなくて、後ろのコトネもです」

コトネ「私もお願いします」

ハヤト「そうか。じゃあどちらから先にする？」

タクヤ「俺から行きましょう」

ハヤト「そうか。じゃあバトルフィールドの方に行こうか」

タクヤ「はい」

バトルフィールドに移動した俺たち。鳥ポケモンは飛べるから気を付けないとな。

コトネ「頑張ってたて事ね」

カズナリ「頑張ってください、タクヤさん」

タクヤ「おうよ」

ハヤト「それじゃあはじめようか」

いよいよ初のジムバトル。楽しみだな。

審判「これより、ジムリーダーのハヤト対挑戦者、タマムシシティのタクヤのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体。道具の使用は認められません」

タクヤ「本気でいきますよ？」

ハヤト「ああ、本気で来い！」

タクヤ「行けっ、ハッサム！」

ハッサム『ハッサム！！』

ハヤト「君のポケモンはハッサムか。それなら、行け、ピジョット！」

ピジョット『ピジョー……ッッッ！……！』

コトネ「あれがピジョット……」

カズナリ「すごく強そうですね」

カズナリはポケモン図鑑を取り出し、検索した。

ピジョット 鳥ポケモン。ピジョンの進化系。発達した 胸の 筋肉は、軽く 翔いただけで 大風を 起こせるほどである。

審判「先行は挑戦者から。それでは、バトルスタート！！」
チャレンジャー

タクヤ「いくぜハッサム！！高速移動からの影分身！！」

ハッサム『ハッサム！ハッサムハッサム！！』

コトネ「タクヤのハッサム、すごく速い。それに分身の数もすごい」

カズナリ「さすがタクヤさんのポケモン。よく育てられているよ」

ピジョット『ピジョッ！？ピジョッ、ピジョッ！』

ハヤト「落ち着けピジョット！分身をすべて巻き込むように風おこし！！」

ピジョット『ピジョー……ッッッ！……！』

タクヤ「甘い！ハッサム、飛翔！！」

ハッサム『ハッサム！！！！！！』

ハッサムは高速で羽を翔かせ、分身全てが飛翔した。

タクヤ「行くぜ！バレットパンチからの燕返し！！！」

ハッサム『ハッサム！ハサハッサム！！』

ハヤト「速い！？ピジョット、よける！」

タクヤ「もう遅い！ハッサム！」

ハッサム『ハッサム！！ハッサ、ハッサ、ハッサム！！』

ハッサムはピジョットに突進し、弾丸のような連続パンチでピジョットを地上に打ち落としたあと、馬乗りになってハサミで数回斬撃を繰り返す。

ピジョット『ピジョッ！』

ハヤト「ピジョット、抜け出してフェザーダンスからの羽休め！」

ピジョット『ピジョピジョピジョッ！！ピジョ、ピジョ。』

タクヤ「回復技ですか……。しかもフェザーダンスで攻撃を下げるのはいい判断だと思う。だが、まだ甘い！ハッサム、剣の舞三連発！」

ハッサム『ハッサム、ハッサム、ハッサム！！！！』

ハッサムが力強く舞う。剣のような影が見えたかと思うと、ハッサムの攻撃が大きく上昇した。

ハヤト「こっちは勝負に出るぞ、ピジョット！ブレイブバード！！

！！」

ピジョット『ピジョーーーーーッッッッッ！！！！

！！！！！！！！』

ピジョットが羽を小さく折りたたみ、低空を高速で飛行していた。大きなダメージを自分が負うかわりに、相手にも大ダメージを与える技。それがブレイブバードである。

ハッサム「行け！ピジョット！！」

ピジョット『ピジョーーーーーッッッッ！！！！！！』

タクヤ「だったらこっちも勝負に出るぜ！ハッサム、ダブルアタック！！！！」

俺はハッサムに抱きついた。

タクヤ「ありがとうハッサム」

ハッサム『ハッサム』

ハヤト「戻れピジョット。よく頑張ったな。おめでとう、タクヤ君。これは勝者の証、ウイングバッジだ。貰ってくれ」

タクヤ「よっしゃ！ウイングバッジ、ゲット！！！」

ハッサム『ハッサム！！！！』

コトネ「タクヤ、おめでとうって事ね！」

カズナリ「おめでとうございます、タクヤさん」

タクヤ「ああ、ありがとう。コトネ、次はいよいよお前のジム戦だ。はじめてのジム戦頑張れよ！！」

コトネ「うん！」

ハヤト「そしたら、ポケモンを回復したらすぐにはじめようか」

コトネ「はい！お願いします、ハヤトさん」

ハヤトとのジム戦に勝利することができたタクヤ。次はいよいよコトネのジム戦。コトネはハヤトに勝つことができるのか。

To Be Continued...

Episode 10 コトネのジムバトルと繋がりのお窟

ハヤト「コトネちゃん、回復も終わったからすぐにジム戦を始めようか」

コトネ「よしっ、頑張るって事ね」

カズナリ「頑張れ、コトネ」

タクヤ「俺も応援してるぜ」

ここはキキョウシティポケモンセンター。キキョウシティジムリーダー、ハヤトのポケモンの回復も終わり、ついにコトネの初ジムバトルが始まるうとしていた。

チャレンジャー

審判「ではこれより、ジムリーダーのハヤト対挑戦者コトネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体。ポケモンが先に倒れたほうが負けとなります。なお、道具の使用は認められません」

ハヤト「タクヤ君には負けただけど、次はそうはいかないよ！行けっ、ピジョット！」

ピジョット『ピジョー！ッ！ッ！』

コトネ「だったら私も本気で行くって事ね。出てきて、マリル！」「マリル『リルル』」

審判「それでは、バトルスタート！」

コトネ「マリル、水鉄砲！」

マリル『リイ、ル！！！！！』

ハヤト「かわして翼で打つ！」

ピジョット『ピジョー！ッ！ッ！』

コトネ「マリル、ジャンプ！そこから体当たり！」

マリル『リルッ！リル！ッ！！！』

ピジョット『ピジョッ！？ピジョー！ッ！ッ！』

マリルの体当たりが直撃した。ピジヨットは大きくのけぞった。あ
のマリル、パワーがすごいな。

コトネ「そのままアクアテール！」

マリル
「マリルッ!!!」

ピョット・ピョット！！！！！！

ハヤト「ピジョット、羽休め」

コトネ「させないって事ね。マリル、水鉄砲連発!!」

マリル^ㇿリイ、
ルーッ！ルーッ！
ルーッ！ルーッ！^ㇿ

ピ
ジ
ョ
ット
□
ピ
ジ
ョ
ー
ー
ッ
！
！
！
！
！
！
！
！
！
！
□

ハヤト「なかなかやるね、コトネちゃん！ピジョット、ブレイブバード！」

[illegible]

!

コトネ「この時を待っていたのよ！マリル、タイミングを合わせて」

マリル
リルッ！

そこにブレイブバード状態のピヨットが接近する。

コトネ「今よ！地面に向かって水鉄砲！！」

マリル
「リイ、
ル——ッ
ッ——!!
!!」

水鉄砲の勢いで上空に飛び上がるマリル。その水柱にピジョットが突っ込んだ。なおも水鉄砲を続けている。

ピジョット『ピジョット! ?ピジョット! ピジョピジョット! ピジョーッ
!』

ハヤト「抜け出せピジヨット！」

コトネ「止めのアクアテール！」

マリル『リイ、ルー……ッッッ！……！』

ピジョット『ピジョッ！ピジョー……ッッ……！……ピ……シヨ……』

審判「ピジョット、戦闘不能。マリルの勝ち！よって勝者、挑戦者」
チャレンジャー

コトネ」

コトネ「やったー……！！！」

タクヤ「スゲエぞコトネ！」

カズナリ「やりましたね、コトネ！」

ハヤト「タクヤ君とのバトルの間にブレイブバードの弱点を見抜かれたのかな？」

コトネ「はい。急に止まれないからその先に攻撃を展開しておけば勝手に突っ込んでくると思っただけです！」

ハヤト「何はともあれ、勝者の証のウイングバッジだ！」

コトネ「ウイングバッジ、ゲットって事ね！」

マリル『リルル』

ジム戦を終えたタクヤ一行は、ヒワダタウンにつながる繋がり洞窟に来ていた。

タクヤ「今日は何曜日だっけ？」

コトネ「多分金曜日だったはずよ」

カズナリ「それがどうしたんですか？」

タクヤ「いやー、保護されてるんだけど、ここは金曜日だけラプラスが見られるんだ」

コトネ「ラプラス！？」

ラプラス 乗り物ポケモン。優しい 心の 持ち主。めったに 争わないため、沢山 捕まえられ 数が 減った。

カズナリ「ラプラスって、絶滅危惧のポケモンですよね？」

タクヤ「ああ。まあ、俺持ってるけど」

コトネ「ええっ！？どうして？」

タクヤ「まあ、研究職目指してるって言っただろ？その度の時にラプラス保護区に行ったんだけど、管理人と仲良くなってさ、卵をもらったんだ」

コトネ「いいな、ラプラス」

カズナリ「せめて見に行きましょうよ」

タクヤ「そだな」

つながりの洞窟を通るタクヤたちは、ラプラスを見に行くことになった。目指すは繋がり洞窟の最下層！

To Be Continued...

Episode 11 ラプラスとロケット団！！

タクヤ「このあたりラプラスが見られるみたいだぞ」

「ここは繋がり洞窟最下層。ラプラスが見られる場所についたはずなんだけど……」

コトネ「いないみたいね……」

カズナリ「どうしてだろう……？」

タクヤ「看板もこうしてあるのに」

看板があり、そこには『毎週金曜日、ここにラプラスがやって来ます。保護区なので捕まえないようにしましょう』と書いてある。しかし、ラプラスがいないのだ。

タクヤ「ま、また今度見に来るか」

そんなことを呟いたとき、変な黒い服を着た二人組が話し合っていた。

黒A「ラプラスも捉えたし、ここに用はもう無いな」

黒B「そうだな。さつさとサカキ様にラプラスを渡そうぜ」

この二人組がラプラスを捕まえたようだ。二人組の近くに、大きなロボットがあった。

コトネ「ねえねえ、あの二人組が捕まえたんじゃないの？」ヒソヒソカズナリ「そうですね。ラプラスを捉えたと言ってますし」ヒソヒソ

タクヤ「そつだな。俺が行くからお前らはここに隠れてる」ヒソヒソ

そんなことを話し合っていたタクヤたち。しかし……

黒A「そこにいるのは誰だ!!」

黒B「我々の活動を見たからには、生きて帰れると思うなよ!!」

タクヤ「マズイ、バレた!クソツ、テメエら。ラプラスを放しやがれ!!」

黒A「誰が放すか!行けつ、クロバット!!」

黒B「そつだそつだ。こいつはサカキ様に渡すのだ!お前も行けつ、マタドガス!」

クロバット「クロバット!!!!」

マタドガス「マタドガス!!」

タクヤ「行つてこい、ガブリアス、ハッサム!」

ガブリアス「ガブツ!!!!」

ハッサム「ハッサム!!!!」

二人組はクロバットとマタドガスを繰り出した。

タクヤ「テメエら、サカキつて言つたな!?!ということはお前らは、ロケット団か!?!」

ロケット団A「バレちゃあしょうがない」

ロケット団B「そつ。俺たちはサカキ様のご命令でラプラスを捕まえに来たのだ!」

タクヤ「ほうほう、ロケット団か……。だったら手加減する必要はねえな!ガブリアス、二人組に向けて逆鱗!ハッサムはシザークロス!」

ロケット団A、B「は?」

ガブリアス「ガブガブガブツ!!!!!!!!!!!!!!」

ハッサム「ハッサム!!!!!!!!!!!!!!」

ロケット団 A「B「グハッ!」」

クロバット「クロバット……」

マタドガス「ま、マアタドガス……」

クロバットとマタドガスは隅でガクブル：（；。・。・）
：していた。

ロケット団 A「クソッ!」

ロケット団 B「こうなったら、マタドガス、煙幕!」

しかしマタドガスは隅で震えていて何もできない。

タクヤ「さあ、覚悟はできてんだろおなあ?」

ロケット団 A「すすす、スイマセンっしたア!」!」スライディング土下座

ロケット団 B「ラプラスは逃がすので、開放してください!」!」ジャンピング土下座

タクヤ「ふうん、じゃあ開放してやる……とでも言うと思ったかあ?」ガブリアス、気絶させる!」

ガブリアス「ガブッ!」!」

ロケット団 A「B「グハッ!」

ロケット団の二人組は気絶してしまった。俺はバッグから穴抜けの紐を取り出し、二人を縛ったあと、ロボットを壊してラプラスを開放した。

ラプラス「キューン!」!」

タクヤ「うお!」

コトネ「うわー、ラプラスだー!」!」

カズナリ「本物は初めて見ました!」

ラプラス『キューン、キューン!!』
タクヤ「やめろよラプラス!」

俺はラプラスにじゃれつかれていた。顔を舐められ、頬に頭をすり寄せられた。

タクヤ「ありがとう、ガブリアス、ハッサム。お前たちは戻れ!」

俺はガブリアスとハッサムをボールに戻した。

タクヤ「じゃあラプラス、俺たちはそろそろ行くよ」
コトネ「そうね。私たちはヒワダタウンでジム戦しなきゃいけないしね」

カズナリ「そろそろ行きましょうか」
ラプラス『キューン、キューン……』

ラプラスは寂しそうにする。しかし保護区のポケモンは捕まえられないのだ。

タクヤ「ゴメンなラプラス。お前は保護区のポケモンだから捕まえたらいけないんだ。だけど、また会いに来るよ」

コトネ「そうね」

カズナリ「そうですね」

ラプラス『キューン?キューンキューン』

俺たちはラプラスに別れを告げ、ここを出ようとした。しかし……

タクヤ「ああ、この二人組とそいつらのポケモン忘れてた。おい、マタドガス、クロバット」

マタドガス「クロバット……!!」ビクッ

タクヤ「そんなに怖がるな。お前たちはどうする？このまま野生に帰るか？」

コトネ「まあ、こんな奴らの手持ちのままより野生に帰ったほうが幸せじゃないの？」

カズナリ「そうですね」

マタドガス『マアタドガス』スリスリ

コトネ「わっ！」

クロバット『クロバツ』スリスリ

カズナリ「うわっ！」

マタドガスはコトネに、クロバットはカズナリに擦り寄ってきた。

タクヤ「こいつら、お前らと一緒にいたいんじゃないか？」

マタドガス『マタドガス！』コクコク

クロバット『クロバツ』コクコク

マタドガスとクロバットは頷く。

タクヤ「じゃあ、こいつらがもっているこれがこいつらのボールか。はい、コトネにはマタドガスのボール。カズナリにはクロバットのボールだ」

コトネ「マタドガス、ゲットって事ね！！」

カズナリ「クロバット、ゲットです！！」

マタドガス『マアタドガス！』

クロバット『クロツ、クロバツ！！』

コトネとカズナリはマタドガスとクロバットをゲットしたあと、ボールに戻した。

タクヤ「それじゃ、ヒワダタウンに行くか」

コトネ「そうね」

カズナリ「そうですね」

タクヤ「おっと、こいつらをヒワダのジュンサーさんに渡さないといけねえな」

俺は縛られたロケット団を担ぎ、歩きだした。

コトネ「よし、ジム戦頑張るぞー！ー！！」

タクヤ「オー！ー！！！！」

カズナリ「頑張ってください！！」

ラプラスをかけてロケット団と戦ったタクヤたちは、新たな仲間、マッドガスとクロバットを加え、次の街、ヒワダタウンに向けて歩きだした。

T o B e C o n t i n u e d . . .

Episode 12 スピードボール！コトネ キリンリキゲットって事ね！

タクヤ「やっと抜けたー」

俺たちはやっと繋がりの洞窟を抜け、ヒワダタウンに来ていた。

タクヤ「よし、こいつらをジュンサーさんに引き渡すか」

コトネ「そうね」

カズナリ「そうですね」

そう、ラプラスの捕獲をしようとしていたロケット団員二人を引き渡すのだ。

タクヤ「ジュンサーさん！」

ジュンサー「どうしたの？」

タクヤ「こいつら、繋がりの洞窟のラプラス保護区でラプラスを捕まえようとしてたので捕まえました」

ジュンサー「あら、ありがとう。それで、ラプラスは？」

タクヤ「しっかり守りましたよ」

ジュンサー「そう。ご協力感謝します」

タクヤ「はい！」

俺たちはジュンサーさんにロケット団を引渡し、ポケモンセンタ―で一夜を過ごした。

次の朝、コトネがこんな提案をしてきた。

コトネ「ねえ、ボール職人のガンテツさんのところに行ってみない？」

カズナリ「いいね、それ」

タクヤ「そうだな。俺もぼんぐり渡しておきたいし」

俺たちはガンテツさんの工房に来た。

タクヤ「御免くださいーい！」

？「はい？」

タクヤ「おや、ガンテツさんですか？」

ガンテツ「いかにも。ボール作成の依頼かな？」

タクヤ「はい。えっと、この白ぼんぐりとみどぼんぐりで」

ガンテツ「ああ、たしかに受け取ったよ。明日にでも取りに来なさい」

タクヤ「はい」

コトネ「ねえねえ、ぼんぐりってどんなボールになるの？」

カズナリ「それは僕も気になります」

コトネとカズナリがそんなことを聞いてきた。

タクヤ「それは、白ぼんぐりが素早いポケモンを捕まえやすいスピードボール。きぼんぐりが月の石で進化するポケモンを捕まえやすいムーンボール。赤ぼんぐりがレベルの低いポケモンを捕まえやすいレベルボール。青ぼんぐりが釣ったポケモンを捕まえやすいルアーボール。みどぼんぐりが捕まえたポケモンが懐きやすくなるフレンドボール。そして、黒ぼんぐりが体重の重いポケモンを捕まえやすいヘビーボールだ」

ガンテツ「よく知っているようじゃな。どうじゃ？これをあげよう。ひとり一個ずつヘビーボール、スピードボール、ルアーボールじゃ」

コトネ「じゃあ私スピードボール」

カズナリ「僕はルアーボールにします」

タクヤ「俺はヘビーボールで。ガンテツさん、ありがとうございました」

ガントツ「大事に使いなさい」

コトネ「よし、早速ゲットに行こう！」

コトネは走り出した。俺たちも追いかけていく。ついた先は、繋がり洞窟の出入口のすぐそこである、三十三番道路だ。

タクヤ「待てよコトネ！」

カズナリ「待ってよー、ってうわっ！」

草むらから飛び出してきたのは、キリンリキだった。

コトネ「キリンリキだ！」

コトネは凶鑑を使う。

キリンリキ 首長ポケモン。尻尾にも 小さな 脳がある。 近寄ると 臭いに 反応して 噛み付いて くるので 注意。

タクヤ「本来三十三番道路には居ないはずなのに」

カズナリ「えっ！？そしたら誰かが捨てたポケモンだろうか」

コトネ「どっちでもいいって事ね。行けっ、チコリータ！」

チコリータ ♪ チッコ! ♪

キリンリキ
リキッ！

キリンリキはダブルアタックを放つ。

コトネ「チコリータ、かわして葉っぱカッター」

チコリータ ♪ チコツ！チツコ！！！！ ♪

キリンリキ「リキイーーーー！！！！！」

キリンリキは葉っぱカッターを受け倒れたが、再び立ち上がった。

タクヤ「いい根性だな」

カズナリ「キリンリキのスピードはなかなかなものです。これは注意が必要です」

コトネ「チコリータ、ツルの鞭で地面に叩きつけて――」

チコリータ「チィッコー――！！！！」

キリンリキ「リッキーーッ！！！！リキ……リ……キ……」

コトネ「今よ、モンスターボール！」

モンスターボールにキリンリキが収まる。一回、二回と揺れ、スイッチが点滅する。しかし……

キリンリキ「リッキィ！」

コトネ「ああ！捕まえたと思ったのに！」

タクヤ「コトネ、さっき貰ったスピードボールを使い！」

コトネ「それがあった！行けっ、スピードボール！！」

今度はスピードボールにキリンリキが収まる。一回、二回、三回と揺れる。そしてパチンツ、と音が鳴り、完全にボールに収まった。

コトネ「ツツツ！キリンリキ、ゲットって事ね――！！」

チコリータ「チコリッ！チコ――！！」

タクヤ「ガンテツさんのボールはすごいだろ？」

カズナリ「ほんとにすごいよ。モンスターボールでダメだったのを捕まえるなんて」

コトネ「ありがとう、チコリータ。よし、キリンリキも加えて、ジム戦頑張るぞー！！！！」

タクヤ「俺も頑張るぜ――！！」

コトネは、新たな仲間キンリキを加え、手持ちポケモンは5体となった。次は、ヒワダジム。果たして、タクヤとコトネはジムリーダーに勝つことができるのか！

To Be Continued . . .

Episode 13 ヒワダジム ヌケニンとタクヤ！！

タクヤ「御免くださいーい！ジムリーダーのツクシさん、いますかー！？」

コトネ「ここが本当にジム？どちらかと言えば植物園のような感じがするんだけど」

カズナリ「ガイドブックには確かにここって書いてますね」

そう、ここはヒワダジム。だが内装は小さな植物園のような感じなのだ。

？「誰だい君たちは？」

タクヤ「挑戦者です。チャレンジャー貴方はジムリーダーのツクシさん、ですね？」

ツクシ「そうだよ。じゃあ、ジム戦ってことでいいんだね？」

コトネ「私も挑戦者です」チャレンジャー

ツクシ「そうか。だったらそちらが先にするか決めてくれるかな？」

タクヤ「コトネ、今回も俺が先に行っていいか？」

コトネ「いいよ、私があとでも」

ツクシ「じゃあ早速はじめようか」

いよいよ俺のジム戦。今回は3on3だが、一体で3タテするつもりだ。なぜなら、アイツを連れてきたからだ。

審判「それでは、ジムリーダーチャレンジャーツクシ対、挑戦者タクヤのバトルを始めます！道具の使用は禁止。使用ポケモンは3体。チャレンジャーどちらかが3体全てを失ったところで終了とします！なお、交代は挑戦者のみ認められます。それでは、始め！」

ツクシ「じゃあ僕から行くよ！行けっ、虫ポケモンの静かなる戦士！」

イトマル『イトオ』

タクヤ「ツクシさん。悪いですが今回の勝負、俺のポケモンを一体も倒せずに終わるでしょう」

ツクシ「何を言ってるんだい？そんなわけ」

タクヤ「あるんですよ。虫ポケ使いである貴方なら、これが何かわかるでしょう？行けっ、俺の切り札っ！」

ヌケニン『ヌケ』

ツクシ「ッ！？そのポケモンは！」

タクヤ「そう、ヌケニンですよ。俺の知る限り、あなたのポケモンはイトマル、トランセル、ストライク。だが、あなたのストライクは燕返しも、翼で打つも覚えていない。イトマルもトランセルもこいつを突破する技はない。貴方はもう詰んだんですよ」

ツクシ「たしかに、詰んだかもしれないね。だけど、勝負は最後までわからない！」

タクヤ「いいでしょう。いくぞヌケニン！」

ヌケニン『ヌケ』

審判「それでは、始めっ！」

その頃、コトネとカズナリは……

コトネ「何、あのポケモン！？」

カズナリ「あのポケモンって、もしかして……！？」

コトネは図鑑を取り出し、調べた。

ヌケニン 抜け殻ポケモン。ツチニンの進化系。羽を動かさずに飛んでいる 不思議なポケモン。背中の割れ目を覗くと魂を抜き取られるらしい。

コトネ「ヌケニン？」

カズナリ「聞いたことがある。進化条件が特殊なツチニンの進化系がいるって。確かそのポケモンは、効果抜群以外の技は当たらない！」

コトネ「なにそれ！？そんなのって、反則じゃない！」

そんなヌケニン談義をする二人だった。

そして、タクヤとツクシのジム戦が始まった。

タクヤ「ヌケニン、剣の舞からの身代わり！そして高速移動！」

ヌケニン『ヌケエエエエエ！！！』

ツクシ「イトマル、糸を吐く！」

イトマル『イトオ！』

イトマルはこちらの素早さを下げようとする。だが……

タクヤ「ヌケニン、かわして燕返し！」

ヌケニン『ヌケツ！ヌケエ！』

ツクシ「速い！？かわして、イトマル！」

イトマル『イトツ！？イトオオオ！』

審判「イトマル、戦闘不能！ヌケニンの勝ち！」

コトネ「一撃で相手を倒した！！！」

ツクシ「強いね、そのヌケニンは。これは本当に詰んだかもしれないよ。僕はまだ、トランセルを信じている。進化すれば対抗できるからね。行けっ、虫ポケモンの誇り高き戦士！」

トランセル『トランセルッ！！』

ツクシ「ひたすら固くなって耐えるんだ！」

タクヤ「固くなって耐える戦法か……。だが、物理防御を上げたところで、特殊技に効果はない！ヌケニン、影分身からシャドーボール連弾！」

ヌケニン『ヌケヌケヌケヌケヌケヌケヌケヌケヌケ！！！！！！』

トランセル『トランセツ！！トラ……ン……セ……』
審判「トランセル、戦闘不能！ヌケニンの勝ち！」

さらに二体目を倒した。次はストライク。燕返しや翼で打つを途中で覚えることに注意すれば大丈夫だ。

コトネ「すごい！あつという間に二体倒しちゃった！」

カズナリ「おそらく、効果抜群の技を覚えるバタフリーに進化するまで耐えようとしたのでしょう」

ツクシ「このポケモンが途中で飛行タイプの技を覚えなかったら完全に終わりだ！行けっ、華麗なる虫ポケモンの戦士！」

タクヤ「いよいよ切り札のお出ましか……。気をつける、ヌケニン！」

ヌケニン『ヌケツ！』

ストライク『ストライツ！！！』

ツクシ「ストライク、影分身！」

ストライク『ストライツ！！！』

ストライクが何体にも増える。だが……

タクヤ「小細工は通用しねえんだよ。ヌケニン、シャドークロー！」

ヌケニン『ヌケツ！！！！』

ストライク『ストライツ！！！スト……ストライツ！』

タクヤ「まだ耐えるか……。だが、次で終わりだ！ヌケニン、燕返し！」

ツクシ「ストライクっ！」

その時、ストライクの翼が光りだし、ヌケニンに突進し始めた。

タクヤ「ここの土壇場で翼で打つを覚えるか……。構うなヌケニン

！そのまま突っ込め！」

ツクシ「ストライク、頑張って！翼で打つ！」

ストライク『ストライツ！！！！！！』

又ケニン『又ケエエエエ！！！！』

そこで、ストライクの翼で打つが、又ケニンに、ヒットした。

ツクシ「やった、又ケニンを倒した！」

だがそこで俺は、ニヤリと笑い、こう言った。

タクヤ「又ケニン、地中から燕返し！」

ツクシ「えっ！」

又ケニン『又ツケエ！』

ストライク『ストライツ！ス……ト……』

審判「ストライク、戦闘不能！又ケニンの勝ち！よって勝者、挑戦者タクヤ！」
チャレン

ツクシ「なんで又ケニンは倒れていなかったんだい？」

タクヤ「俺の最初の支持を忘れたのかい？身代わりを使って、本体は穴を掘るを使わせていたんだよ」

ツクシ「そうだったんだ。戻れストライク、お前はよくやった。これが勝った証、インセクトバッジだ。大事にしてね」

タクヤ「おうよ。又ケニン、ありがとな」

俺は又ケニンに抱きつく。すると又ケニンは照れたように鳴いた。

コトネ「次はいよいよ私の番ね。よし、タクヤに負けなくらい頑張るぞ！」

見事、ジムリーダーツクシを下し、インセクトバッジを手に入れ

たタクヤ。次はコトネのジム戦。はてさて、どうなることやら。

To Be Continued . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2786z/>

ポケットモンスター ジョウトに転生!?

2011年12月16日17時49分発行